東日本支部研修会アンケート結果

参加者：143 名（スタッフ含）
アンケート回答数：94 名

1. 性別

男性：21 名　　女性：73 名

2. 年代

10 代：0 名　20 代：6 名　30 代：16 名　40 代：32 名
50 代：24 名　60 代：5 名　70 代：9 名　80 代以上：0 名

3. 住所地

福島県：81 名　青森県：1 名　岩手県：2 名　秋田県：0 名
山形県：2 名　宮城県：1 名　栃木県：0 名　その他：6 名

4. 職種

医師：0 名　看護師 21 名　ＳＷ：6 名　医療事務：2 名
ケアマネ：37 名　ヘルパー5 名　介護関係：5 名　役所職員：1 名
その他：23 名（一般・学生・ＯＴ・ＰＴ・保健師・民生委員…）

7/20東日本支部研修会　意見・感想

・とても勉強になりました。

・これから今回のことを生かして共生社会のために実践していきたいと思います。

・地域の中でのホームホスピスの役割について聞けてよかった。一つ一つ協力して積み重ねていきたいです。

・福島市にもこういう所がニーズに合わせてたくさんできれば、どのように死を迎えるか、選択肢が増えて良い社会
個々の幸福が叶えられる社会になるのではないだろうかと思いました。

・「死は医療ではなく文化である。決して恐れるものではなく残された人につなぐバトンになるのだ」との言葉に感じるものがあった。

・寄り添う大切さについて学んだ。

・宮崎市のホームホスピスは、地域の中で一人で寂しく年老いていく方々にとって安心して最後を迎えられる場所だと思いました。
今後広がってほしいし、ケアマネとして何ができるか考えなければと思わされました。

・“いのち”と向き合ううえでどんなことができるのか？本人や家族の思いに寄り添ううえで必要な事、大切な事を学ばせてもらいました。

・ホームホスピスということを耳にしたことなありますが、今回仕組みや実践を学ぶことができました。

・市原先生の宮崎での活動に感心しました。関心をもって活動絵を知るように努めていきたいと思います。

・生活している人が自分らしく地域で生活できるように利用者さんたちの望む生活は何か、向き合っていきたいと思いました。

・家は安住の地、そこで暮らし死んでいけたら、そのために何ができるのか調べて活動していきたいと思いました。

・その人の尊厳を守り、居場所があり、自分の役割が確立できることでホームホスピスのあり方がよく理解できました。

・ホスピス→ガン末期で医療ニードが高いので家族が大変なので看取ることをホスピスと考えていたが、今は本人らしく笑顔で向かえる
場所だと。心がやさしくなれた気がしました。

・看護師の意識を少しずつ生活者としての視点で看護が維持できるような体制作りを続けていきたいと思いました。

・本人がどのような生活を希望してるのか、その希望に合わせたケアができるホームホスピスはとても素晴らしいと思いました。
特に自宅でなくとも家族が看取りに密接に関わることができる点が強く印象に残りました。

・ホームホスピスに対しては知識がなかったため大変役立ちましたし、考えさせられました。

・先生方のお話を聴かせていただき「生」の原点を見つめ生活を支えていくケアを実践していきたいと感じました。

・その人らしい、その人が望む汲田氏・亡くなり方が出来るように広がっていくといいと思います。包括の活動の中で伝えていきたい。

・日頃から「人にとって生きる意味」を聞かれることがあります。その答えになることを感じられたように思います。

・延命を望まないのに救急車を呼んだり、まだまだ往診して下さる先生が少なかったりとなかなか看取りに困難なことも多いですが最期を迎える場の一つの手段としてこれからはホスピスも提案していけたらと感じました。

・自分の住む地域にホームホスピスが立ち上げられたらと思う気持ちが高まるのですがやはり「地域」はかかせないもので…考えがまとまらない状況です。今後少しずつ考えをまとめつつ何か行動したいと思います。

・医療と介護の連携はもちろんですが、看護師も介護士も利用者様もその家族も、携わる人々全てが地域の住人として家族として皆で“生きていく”ということの言葉の意味を今回の話を聞かせていただき考え直し、また今後の課題であると思いました。

・地域の中から生まれる場であり最後のみの利用でなくても可能な場となる事が今後の地域の発展にもつながると考えられました。

・病院にいることで自由が奪われてします、人の死とは何だろう、生きることとは何だろうと常々考えさせられます。今回のお話を聞きとても感動しました。今後の在り方を考えました。

・パネルディスカッションが充実していて良かったと思います。

・最期まで自宅で安心して生きて行けるシステムこそが最も必要なのではないかと考えている。

・ホームホスピスにおいても自宅と同様であって、すべてが末期Caの方だけでなく利用を行い本人の意識を大切にしていかなければならないと思いました。

・ホームホスピスが死を受け入れやすい、地域の方々にも理解していただけるようなアナウンス（講演会等）をもっと行ってほしい。

・ホームホスピスが地域の核になるという考え方に共鳴いたしました。

・ホームホスピスとは看取りの場と思ってる人が多い。正しい情報を伝えていきたい。

・ホームホスピスとは死を迎える場所と思いがちですが、地域の中で、自宅の中で、家族の中で、その一人一人の中で生活する、暮らして行く場所であり、明るくあたたかな家であると感じました。

・理想の最期は人それぞれですが、当たり前の日常生活の中で逝けるというのは本当に素敵な事だと思います。本人・家族・ホームホスピスで働く方々の思いが同じにならないと難しいでしょうからその環境のすばらしいと想像します。

・看取りとはどうしても特別な事と考えてしますが、日々の暮らしの延長上に看取りがあると感じられるようになるにはまだまだ時間と経験が必要だと思いました。「一日一日を丁寧に暮らす」という言葉がとても響きました。

・「死」を避けるものでなく家族と一緒にスタッフも肯定的に誰にでも訪れるものとして迎え入れていくことが大切なんだと思いました。

・住まいや暮らし、地域社会、日常の生活を全て含んだホームホスピスというものを理解することができました。普段の生活でも住まいや暮らしのコミュニティを築いていこうと思います。

・どんな取り組みをされているのか細かく説明して頂きたい。普段の仕事、生活の様子を見てみたいと思いました。

・これからはホームホスピスはもっと必要になると思います。福島にももっと増えればいいと思いました。

・何が出来るか分かりませんが少しでも市民運動、文化としてのホスピスが地域の広がっていくように「努力したい」と考えさせられた研修でした。

・その人に合う生活リズム・過ごし方、その人がしていたリズムその人にとってここに居たいと思え過ごせる・出来るように介護側は何が出来るのか考えさせられました。最期まで穏やかな生活が出来るよう生命を見逃さないようご本人・ご家族との関係を深めたいと思いました。

・昔は当たり前だった地域の関わりがいかに大切かを再認識しました。また、家で最期を迎えることは家族にとって精神的支えになっていることも今まで気づきませんでした。暮らしが豊かになるにつれて共生の気持ちや人との関わりが薄くなっていることを感じました。

・「地域共生社会」を大切に、まずは（住まいの）福島がケアドリームで包まれればいいと思います。これからどの様に携わりお手伝い出来るのか。そして喜んでいただけるのか勉強してまいりたいと思います。

・日々の暮らしの延長上でその人らしく死を迎えることがその人のその家族にとって自然な事なんだと学びました。

・ホームホスピスが福島・伊達に設立されているようですが更にその状況についても知っていきたいと思いました。

・ホームホスピスの必要性は大きいが何故福島市に2か所と少なく、全国的にもまだまだ理解されていないので情報発信が必要と思いました。地元、茂木さんの講演も聞きたいです。

・地域にホームホスピスがあればどれだけの気持ちの救われる人がいるだろうかと感じましたし、あることで地域の力が蘇るような思いを感じました。「みんなが「普通の幸せ」を求めてもいいはずだ、でもそのためにどうするか」ということで大小さまざまな問題が山積みになっていて、停滞してる地域はどこにでもあるのではと思います。世代によって違うこと、それでも変わらないとこ、大事なことを手放さずに、良いものを広めて新しい形を進めていく力を応援したいと思います。

・もっと身近にあることが分かれば心地よい死というものを安心して迎えられると思いました。気薄な社会環境が目立つ時代ですが都会よりは田舎から活動を活発にしていけば、共生共働が浸透しやすいのかなと考えました。

・在宅診療・訪問診療の情報が不足してる気がします。もっと簡単に得られるようにならないでしょうか。

・典夫先生の話は建研究発表みたいでよく分からない。

・事例を交えての話をもっと。

・福大鈴木先生の話された内容は初心者の私には難しいもので、ほとんど理解できませんでした。

・ホームホスピスは理想的な終末迎えられる終いの棲家だが金銭的にも余裕がないと利用できない。こういった方々をどう受け入れたり援助していくのか。